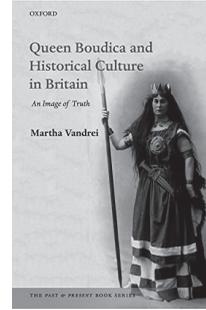


書評

Martha Vandrei,
Queen Boudica and Historical Culture in Britain: An Image of Truth
 (Oxford: Oxford University Press, 2018)

光永 雅明



ブーディッカ (Boudica, Boudicca。ボアディケア Boadicea 等とも表記される) は古代ブリテン島のイケニ族の女王である。本書にもあるように、国王の夫が死去したのちローマ帝国への反乱を試みたが敗退し、自害ないし病死したと言われる。その名はヴィクトリア時代の研究者にもなじみ深いだろう。たとえば1902年にロンドンのウエストミンスター橋のたもとに設置された、戦車を駆るブーディッカとその娘たちの彫像を想起する方もおられよう(「ボアディケア群像」、トマス・ソーニクロフト作)。

その私たちにとって歓迎すべきなのが、エクセター大学の歴史学部門で上級講師を務める著者による、博士論文(ロンドン大学キングズ・カレッジ)を基にした本書である。「パスト・アンド・プレゼント」シリーズの一冊となる本書はイギリス Britain で作られた多様な作品—歴史書、詩、小説、戯曲、映画、彫刻等多岐にわたる—において彼女がいかに描かれていったのか、それがどのように受容されていったのかを精力的に論じる。扱う時代は17世紀から20世紀初頭までにも及ぶ。ヴィクトリア時代と重なるのは本書後半部分のみだが、それにもかかわらず—あるいはそれゆえに—、本書は注目に値しよう。

本書の第4・5章によると従来は、ブーディッカの意味付けが19世紀に大きく変遷したとの見方が強かったという。まずヴィクトリア時代初期にかけて「ナショナルなヒロイン」(116)との見方が広がる。これを後押ししたのがウィリアム・クーパーの「ボアディケア：頌歌」(1782)の一般への浸透である。次にインド大乱(1857)を契機にブーディッカには「反抗的な野蛮人」(140)とのイメージが生まれる。それを促したのがアルフレッド・テ

ニスンの「ボアディケア」(1864)である。しかし19世紀後半までには「帝国のアイコン」として「再創造」される(146)。それを後押ししたのが上述の彫像などとなる。

以上の見方に著者は異を唱える。19世紀という特定の時代に特定の過去(ブーディッカの特定の見方)が一部の人々によって「創造」「再創造」されていったという「[伝統の創出]パラダイム」(7)によっては、ブーディッカ像の歴史も、さらには、人々が過去をどのように見たのかという歴史理解の歴史も、十分には把握できない—これが「序論」における著者の主要な問題提起と理解してよいだろう。あえて長期的なスパンでブーディッカ像を洗い出し(いわば第一の主題)、その間の人々の歴史理解も論じる(いわば第二の主題)という、強い意気込みがあふれる本書の設定は、ヴィクトリア時代のブーディッカ像の従来理解に対する疑問に大きく端を発すると考えられよう。

では本書の構成に従って著者の議論をたどりつつ、内容の紹介と検討を進めてゆきたい。ただ紙幅の都合もあり、第一の主題が中心になることをお断りしておきたい(なお第1章から6章の正題は史料からのエピグラムのな引用文であるため、各章の副題を参考までにあげる)。

まず著者は「序論：ブーディッカ女王と歴史文化の思想」で上述の主題等を詳述する。本稿では立ち入れないが、本書は「歴史文化」historical culture 研究—著者によればロッテルダム大学など欧州側で先行しつつある—に依拠することも示される。次いで第1章から3章で著者は、17・18世紀におけるブーディッカ像の歴史を掘り起こす。

冒頭の第1章(「女王と古物研究家」)がまず強い印象を与える。エドマンド・ボウルトンの歴史書『ネロ・カエサルないし墮落した君主制』(1624)に焦点があてられるのだが、同書で描かれるブーディッカ像には、新ストア派の同時代的影響に対するボウルトンの懸念もこめられていると言う。同時に古物研究・歴史研究の成果も本書で示そうとしたボウルトンの狙いの多面性にも、注意が向けられる。作り手側に詳細に立ち入ることで、ブーディッカ像の複雑性に光を当てるという著者の手法とその成果がまずここで明らかとなる。

17世紀半ばから18世紀初頭を扱う第2章(「歴史家、劇作家、史劇」)も劣らず興味深い。著者は出版市場の成長にも注目し、一般読者を対象とする女性の伝記類が刊行される中、ブーディッカが「勇敢なヒロイン」(65)として描かれるようになったことも示す。さらにチャールズ・ホプキンスによる戯曲『ボアディケア、イギリスの女王、とある悲劇』では、性暴力(ローマ兵によるレイプ)が彼女の娘にもたらした帰結やそれを知った母の「心理的な混乱」(72)が書き込まれるに至ったことを明らかにする。ブーディッカの描き方がこの時代に大きく進展したことが十分な説得力を持って論じられている。

第3章(「18世紀におけるドルイド、愛国者、批評家」)では、歴史書や戯曲を用いて当時の多様な政治的関心が彼女の造形に盛り込まれていることが示される。より注目すべきなのは、過去の恣意的な作り変えもまた困難だったとの主張であろう。たとえば演劇『ボアディケア、イギリスの女王』(1753)の作者リチャード・グローヴァーは、「歴史」や「人間性」を正確に解釈しているか否かとの観点から批評の対象となった(105)。作者側は無論、受容側の実態からも歴史の中での作品の意味付けを再考してゆく著者の姿勢が窺える。

本書の後半では19世紀以降が主として扱われる。第4章(「19世紀初期の歴史文化における過去と現在の交渉」)の前半では、女性を対象とする教訓的な伝記類の出版等が進んだこの時期に「ナショナルなヒロイン」としてのブーディッカ像が広がったとの主張が検討される。著者は17世紀における類似した出版物との継続性をまず強調し、そのうえで、女性の作者が登場し「女性によりつくられた女性のための」歴史書になったこと、ブーディッカの「最初の真に「フェミニスト的な」読み」が登場したこと等の変化(127)を説得的に提示する。本書前半の成果と接合することで19世紀における歴史像を新たに示す章と言えよう。なお4章の後半は、インド大乱を契機にブーディッカ像が新たに作られたとの主張を検討したものである。著者はその根拠とされるテニスらの作品を分析し、別の解釈を試みている。

第5章(「帝国のヒロイン」)は、ロンドン橋における彫像の詳細な検討である。著者はこの時代にブーディッカと帝国主義の結びつきが強まったと

の理解を単純に否定するわけではない。むしろこの彫像の歴史を精査することで、この彫刻が持つより複雑な意味を明らかにしてゆく。著者はまずソーニクロフトによる制作過程を掘り起こし、本像の祖型の石膏像は1860年代までに完成しており、制作意図も帝国称揚ではなかったことを明らかにする(ブーディッカと二人の娘の「感情」に対するこの彫刻家の強い関心を明確にしている点が注目されよう)。次いで祖型からブロンズ像が作られロンドン州議会の関与のもと設置されたのは、ブーディッカに対しロンドンで考古学的関心が高まったのが背景だったと言う(州議会の公園・オープンスペース委員会の関与がとくに興味深い)。著者の議論は、作者の伝記的背景にも踏み込みつつ、この像を単に「帝国のヒロイン」と捉える見方を大きく揺るがせることに十分、成功していると言えよう。他方、まさにその結果だが、彼女に対するロンドンでのローカルな関心や顕彰が、パトリオティズム・ナショナリズム・帝国主義といかなる関係にあったのかという重要な問いもまた一著者は必ずしも十分に立ち入っていないと思われるが一浮かび上がったと考えることもおそらくできよう。

なお第5章では、本彫像の写真も用いたメアリ・トレヴェリアンの小説『予告されていたイギリスの偉大さ』(1901)も検討される。ブーディッカの反乱を扱う本書は確かに「ジング的」であったものの、歴史的に不正確との批判を批評家から浴びており、第3章と同様、受容側からの限界に光が当てられる。

第6章(「ウエールズからエセックスまでのブーディッカ」)は、イギリスの各地域・地方におけるブーディッカへの関心を掘り起こす。特にウエールズに関しては、19世紀から20世紀初頭にかけて「文化ナショナリスト」たちが、ウエールズと彼女との歴史的関係を推測して、ウエールズとブリテンとの歴史的一体性を強調していったという示唆に富む議論がなされる。彼女への地域的・地方的な関心と、パトリオティズム・ナショナリズム・帝国主義との関係に著者は詳細に立ち入っているわけではないと思われるが、上記のウエールズの例をはじめ、それを考える糸口や材料も豊富に得られよう。

以上の短い検討からではあるが、本書がヴィクトリア時代の研究者に対し非常に多くの示唆と刺激を与えてくれることは間違いないと言えよう。

各章の個別の議論が示すようにブーディッカを描き出す様々な作品はヴィクトリア時代研究の多くの専門領域にまたがっており、本書には多くの研究者たちの関心が寄せられると思われる。とくにあえて数世紀にもわたって対象時代を設定し、また、ブーディッカを描く作品の作り手側の意図や受容側の理解を多面的に掘り起こすことで、彼女の見方に関する従来の理解を乗り越えようとする著者の議論は、大いに注目されよう。

また本稿では踏み込めなかったものの、とくに歴史研究者は、著者による歴史論にも関心を惹かれるのではないかと思われる。「伝統の創出」論への批判は無論、「歴史文化」論、そこに含まれる「歴史的眞実」‘historical truth’ と著者が仮に呼ぶものの考察など（「序論」）がそれである。「歴史的眞実」の概念とも関連すると思われるが、フィクションであっても過去を扱う作品には「歴史」や「人間性」上の一定の正確性が求められるに至ったという議論（第3章）も興味深い。「結論」の後半では、著者自身今後の課題と位置付けるものの、これに関連する示唆に富む指摘も出される。

本書は、高い意欲と力量にあふれる著者による、最初の著作となる。この力作を大いに歓迎するとともに、この主題に関心を持つ多くの研究者に一読を勧めたい。

— 神戸市外国語大学教授